

資料 (Note)茨城県内陸部で保護されたアカアシカツオドリ  
(カツオドリ目, カツオドリ科) の記録佐野拓哉<sup>1</sup>・後藤優介<sup>1</sup>

(2025 年 8 月 17 日受理)

A Red-footed Booby (Suliformes, Sulidae) Protected in the Inland Area of  
Ibaraki Prefecture, Central JapanTakuya SANO<sup>1</sup> and Yusuke GOTO<sup>1</sup>

(Accepted August 17, 2025)

## Abstract

In August 2024, a weakened red-footed booby, *Sula sula*, was protected in Joso, Ibaraki Prefecture. Up to the present, this species had been observed in Ibaraki only in 2019 in an offshore area between Hitachinaka Port and Oarai Port on the ferry route connecting Oarai Port and Tomakomai Port. The present observation seems to be the first case that a red-footed booby flew into an inland area of Ibaraki. This individual was thought to be a juvenile from the color of its beak and its plumage. It seems possible that the bird had lost its way as a result of strong winds from a typhoon passing offshore of Ibaraki during that period.

**Key words:** Ibaraki Prefecture, inland area, Red-footed Booby, *Sula sula*.

## はじめに

アカアシカツオドリ *Sula sula* (Linnaeus, 1766) は、熱帯および亜熱帯太平洋、インド洋、大西洋の島嶼で繁殖する外洋性の鳥類である。日本国内では、硫黄列島や小笠原群島の母島など、一部の島嶼部で繁殖が記録されている。また、北海道から沖縄県八重山諸島までの広範囲にわたって観察記録があり、その多くは稀な旅鳥や迷鳥としての偶発的な記録とされている (日本鳥学会, 2024)。これまで茨城県では、2019 年 6 月 23 日に苫小牧–大洗航路上の常陸那珂港沖と大洗港沖間で観察された記録があるのみである (日本野鳥の会茨城県, 2019)。2024 年に茨城県の常総市で本種が確

認されたが、本県の内陸部における記録としては初めてであると考えられるので報告する。

## 保護の状況および経過

本個体は、2024 年 8 月 22 日 18:00 頃、常総市内守谷町の草地でうずくまっているところを地域住民により発見された (図 1, 2)。連絡を受けた著者の一人、後藤が 19:10 ごろ現地で確認し、鼻孔のない太く長い嘴と、赤みを帯びた足から、アカアシカツオドリであると同定した。嘴基部がピンク色で先端部が黒色、頭部から頸部にかけて淡い褐色をしていることから若鳥であると考えられた (箕輪, 2020)。また、翼上面と尾

<sup>1</sup> ミュージアムパーク茨城県自然博物館 〒306-0622 坂東市大崎 700 (Ibaraki Nature Museum, 700 Osaki, Bando Ibaraki 306-0622, Japan).

羽は褐色であった。性別については、雌雄同色であることから判別できていない。確認時、本個体は一カ所から動かず、時折目を閉じそうになりながら体を前後に揺らす行動が繰り返され、衰弱している様子であった。また、離れた場所から静観すると、頭部を背中側に折り曲げて羽根の中にうずめる行動も見られた。本種は茨城県内では極めてまれな種であること、衰弱したまま放置しておくことで別の動物に捕食される可能性が高いことなどから、一時保護を行った。翌日、茨城県県西県民センターに本個体を保護したことを報告した後、県指定の獣医師と協議した上で、輸送ストレスによる衰弱などを考慮して、ミュージアムパーク茨城県自然博物館で給餌をしながら経過を観察し、回復が見られれば速やかに放鳥をすることとした。

搬入時の本個体は明確な外傷はないものの、人が近くにいても目を閉じそうになる行動が継続的に観察された。餌のイワシを目の前に差し出しても自力で食べようとする様子がないことから、口をあけてイワシを喉にいれる強制給餌を行った。搬入後は段ボール箱に収容していたが、体がふらつく様子が見られなく

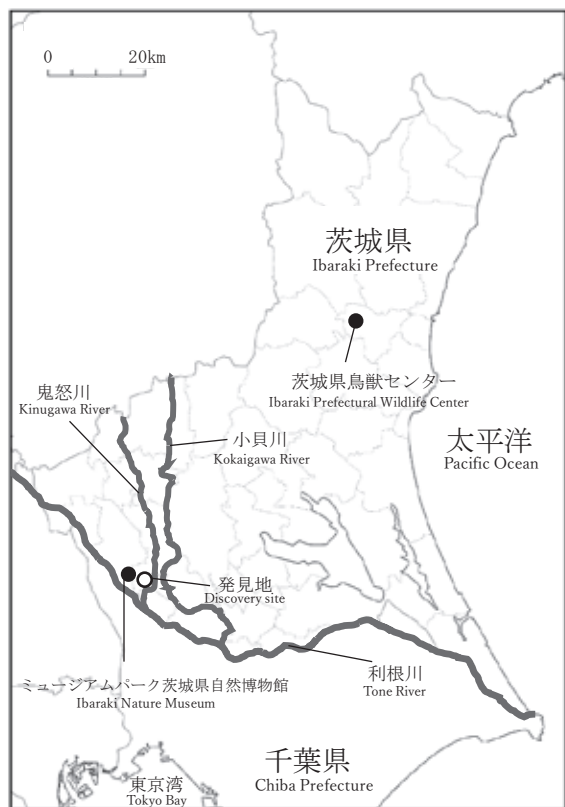


図1. 茨城県常総市におけるアカアシカツオドリの発見地。  
Fig. 1. Location (○) where the red-footed booby was discovered in Joso City, Ibaraki Prefecture.



図2. 発見時のアカアシカツオドリの若鳥 (2024年8月22日撮影)。  
Fig. 2. Juvenile red-footed booby at the time of discovery (Photo taken on August 22, 2024).

なったことや運動量の減少による筋力の低下を考慮して、8月25日に木製ケージ(幅約2m×奥行1m×高さ1m)に移動させた。その後も給餌を継続したが、明確な回復の兆しが見られず、8月28日に那珂市の茨城県鳥獣センターに搬送した。

博物館での保護期間中は、1日に2～3匹のイワシを給餌した。本個体の搬入時の体重は計測していないが、8月24日から28日の間、給餌時に計測した体重変化を図3に示す。給餌による体重の増加と、消化・排泄等に伴う体重の減少が繰り返されたが、体重の増加傾向はみられなかった。給餌後に消化途中の餌を吐き出す行動が2回観察されたが、保護期間中の体重の最小値は餌の吐き出し直後の679g、最大値は25日の3回目の給餌直後の864gであった。給餌から給餌までの経過時間と、その間の体重減少量から、1時間あたりの体重減少速度を算出したところ、7.1～12.3g/hの幅があり、平均では $9.6 \pm 1.4 \text{ g/h}$  ( $n=10$ )であった。鳥獣センター搬入後は、落とした餌を自分で採食する程度まで回復したが、9月1日に死亡した。死体から本剥製を作成し、ミュージアムパーク茨城県自然博物館に収蔵した(標本番号INM-1-131071)。(図4)

## 考 察

茨城県に隣接する千葉県において、平田ほか(2022)は14件の保護および観察事例を報告している。13件が東京湾奥部、1件は太平洋側での観察・拾得で、すべて沿岸部における記録であった。これらのうち、8

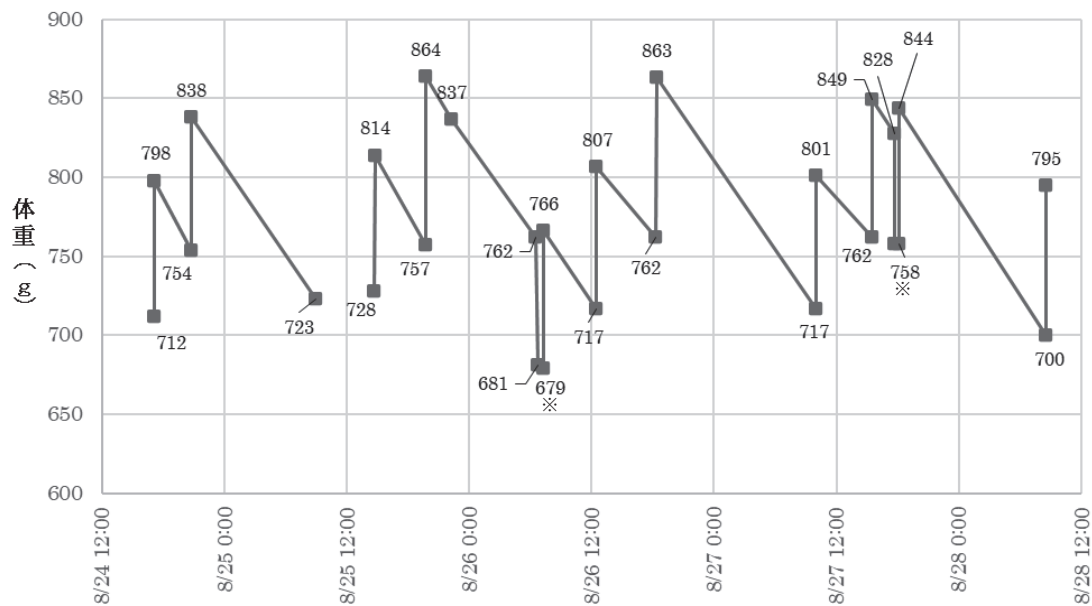


図 3. 一時保護期間中のアカアシカツオドリの体重変化 (2024 年 8 月)。一部、データの欠損期間がある。給餌前体重は給餌後の体重から餌重量を引いて、吐き戻し前の体重は吐き戻し重量を引いて算出した。※は餌の吐き戻しを示す。

Fig. 3. Body weight changes of red-footed booby during the temporarily protected period (August, 2024). There are some periods without data. Pre-feeding body weight was calculated by subtracting the food weight from the post-feeding body weight, and pre-regurgitation body weight was calculated by subtracting the regurgitated weight. \* indicates regurgitation of food.



図 4. 常総市で保護されたアカアシカツオドリの本剥製標本 (標本番号 INM-1-131071)。嘴と脚は着色されている。

Fig. 4. Stuffed specimen of the red-footed booby protected in Joso city (specimen number INM-1-131071). The beak and legs have been stained.

件は、観察地に近い観測地点で最大風速が 10 m/s を超える風があった日から 2 日以内に記録されており、強風の影響で迷行したと考えられている。また、茨城県よりも内陸に位置する群馬県では 2 件の記録があり、そのうちの 1 件は台風の影響による迷行の可

能性が指摘されている一方で、もう 1 件は最寄りの観測地点での強風の記録はなく、内陸への飛来理由は不明とされている (高橋ほか, 2024)。茨城県においては、本個体が保護される前の 2024 年 8 月 16 日から 17 日にかけて台風 7 号が沖合を通過している (気象庁, 2025a)。保護地に最寄りであるつくば市の観測所では、16 日の平均風速は 2.9 m/s、最大瞬間風速は 11.4 m/s の北北東の風、17 日の平均風速は 2.2 m/s、最大瞬間風速は 10.5 m/s の北北西の風であった (気象庁, 2025b)。

また、本種の体重は箕輪 (2020) では 766 g ~ 1210 g と記載されている。平田ほか (2022) の報告で本個体と同様に夏季に本種が飛来し体重の記録があった 4 例のうち、成鳥 2 例の体重は、保護時に右上腕骨開放骨折と出血多が認められ、その後死亡した個体で 902 g、漂着死体として拾得された個体で 963.7 g であった。一方で、保護後に死亡した 2 例の幼鳥の体重は、台風の通過後に保護された個体で 689 g、保護時の状況の記載がない個体で 498 g であった。本報告の保護個体は若鳥であり、健全な体重についての知見はないものの、保護期間中の最低体重が 679 g、給餌前の空腹時

体重が700 g前後であったことから、良好な栄養状態ではなかったことが推察される。本個体が内陸部で確認された原因については不明だが、近隣県の状況および体重計測値から、台風通過による強風で迷行し、その後、自然下で餌を採食できずに衰弱した可能性が考えられた。

## 謝 辞

本個体の保護にあたり、浜野 一氏、鈴木 栄氏およびミュージアムパーク茨城県自然博物館の伊藤彩乃氏には発見から博物館への連絡、現地対応のご協力を頂いた。茨城県県西県民センターの本橋建一氏および獣医師の弦巻 肇氏には、一時保護に至るまでの対応について協議頂き、必要な処置などについてご助言頂いた。茨城県植物園の小林慎行氏には、本個体の鳥獣センターでの収容およびその後の情報共有にご協力頂いた。日本野鳥の会茨城県副会長の飯田直己氏には、保護中の個体の栄養状態や放鳥判断の目安などについてご助言を頂くと共に、茨城県内における過去の記録

に関する情報を提供頂いた。ここに深くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 平田和彦・小田谷嘉弥・白川浩一・黒田理生・神田義之・椎原路子・澤本将太・森 颯人・桑原和之. 2022. 千葉県におけるアカアシカツオドリ *Sula sula* の記録. 千葉中央博研究報告, 16 (1): 61–67.
- 気象庁. 2025a. 日々の天気図 No.122 2024年8月. <https://www.data.jma.go.jp/yoho/data/hibiten/2024/2408.pdf> (2025年5月4日参照).
- 気象庁. 2025b. 過去の気象データ検索 日ごとの値 つくば 2024年8月. [https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily\\_s1.php?prec\\_no=40&block\\_no=47646&year=2024&month=8&day=&view=p1](https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily_s1.php?prec_no=40&block_no=47646&year=2024&month=8&day=&view=p1) (2025年5月4日参照).
- 箕輪義隆. 2020. 新 海鳥ハンドブック. 104 pp., 文一総合出版.
- 日本鳥学会. 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 506 pp., 日本鳥学会.
- 日本野鳥の会茨城県. 2019. 日本野鳥の会茨城県会報 ひばり, (351). 24 pp., 日本野鳥の会茨城県.
- 高橋尚汰・深井宣男・石塚 徹. 2024. 群馬県におけるアカアシカツオドリの観察記録. 群馬県立自然史博物館研究報告, (28): 245–246.

## (要 旨)

佐野拓哉・後藤優介. 茨城県内陸部で保護されたアカアシカツオドリ（カツオドリ目、カツオドリ科）の記録. 茨城県自然博物館研究報告 第28号 (2025) pp. 81–84.

2024年8月、茨城県常総市においてアカアシカツオドリが確認された。茨城県内での本種の記録は、2019年における苫小牧–大洗航路上の常陸那珂港沖と大洗港沖間での1例のみであった。茨城県内陸部での記録としては初めてのものであり、嘴の色や羽色から、本個体は若鳥であると考えられた。本個体が確認される前に台風が茨城県沖を通過しており、強風による迷行の可能性がある。

(キーワード): 茨城県, 内陸部, アカアシカツオドリ, *Sula sula*.